広報 るもい
●特集 緑豊かな暮らしをもとめ
昭和62年5月／発行・留萌市
編集・総務部秘書企画課
印刷・株式会社 留萌新聞社
1987
5

◆連載 いま留萌むかし

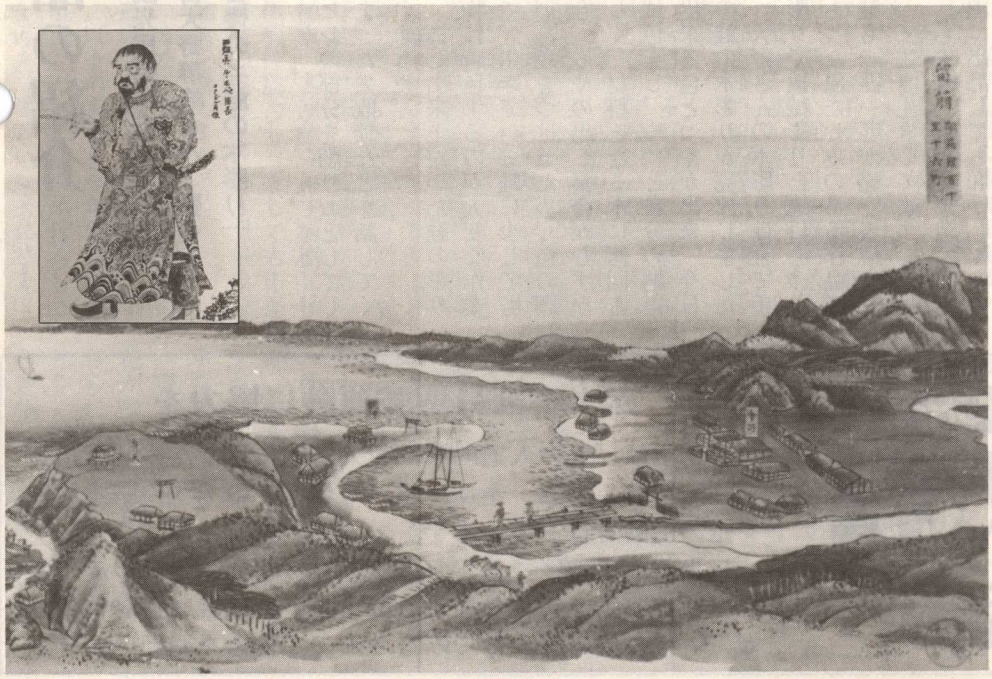
・留萌のコタン

現在の元町。明治、大正生れの古老に言わせると川北とかコタン浜と言う。川北というのは読んで字の如く、川の北側という意味である。この川とは留萌の母なる川留萌川である。戦後生れや、新しく留萌へ移り住んだ人にとっては、留萌川の南にあるのに、どうして川北というのかと疑問に思う人もいるであろう。それは、ちょっと留萌の歴史をひもとくとわかるのである。留萌の港ができる以前、留萌川は、現在の港の中を蛇行しながら流れていたのである。まさしく、現在の元町は、川の北側だったのである。それが港をつくるために川を切り換えた。その結果、川北が川南になったのである。

もう一つの別名、コタン浜これは、川北の語源よりもう少し留萌の歴史をさかのぼるとわかってくる。江戸時代、留萌がまだル、モッペと呼ばれていたころのことである。ル、モッペには多くのアイヌ人たちが住んでいた。そして三つの大きな村（コタン）があった。一つはレウケコタン（礼受）、もう一つはル、モッペコタン（留萌）、そしてウスヤコタン（臼谷）である。この中でも一番大きな、ル、モッペコタンがあったのが元町なのである。アイヌの人たちは元町にあったコタンをただコタンと呼んだ。つまり、留萌地方でコタンと言えば元町にあったル、モッペコタンを指したのであった。

このコタンには、この地方で最も家柄の良い、財産持ちの村長（むらおさ）が住んでいた。一番有名な村長にはコタンヒルという名のものがいた。十八世紀の終りごろから十九世紀の初めにかけて活躍した人である。いろいろな逸話が、当時の和人の書いた書物の中にでてくる。武藤勘蔵という人の書いた「蝦夷日記」には、蝦夷地でも有名な財産家の一人であると書かれている。それを裏付けるがごとくコタンヒルの肖像画が残っている。往時のアイヌの人たちの中で、その面影を知ることのできる唯一の人物であるこれを見ると、中国から渡来した蝦夷錦といわれる服を着て、腰にはりっぱな太刀を吊るし、皮のきゃはん、靴も大陸から渡来したものと考えられ、手にはキセルとアイヌ彫タバコ入れを持ち、威風堂々たる姿である。昔日の留萌地方の繁栄の様子が偲ばれる肖像画である。このコタンヒルの家系が、代々留萌地方の村長として、元町のコタンに本拠を置き、他のコタンの村長たちのリーダーとして君臨していたのである。

現在、このコタンの跡は元町五丁目から塩見町にかけて残っているにすぎない。留萌築港という新しい留萌の出発にあたって海の中へほとんど消えてしまった。新ル、モッペコタン（留萌市）が留萌地方の新しい中心コタンとして地域にリーダーシップを発揮してゆくことが、古いコタンの上に築かれた新ル、モッペコタンの責任ではないだろうか。



人の動き　男16,766（減313）・女17,696（減215）・合計34,462（減528）　世帯数12,844（減173）3月末現在